

認知する話者の<イマ・ココ> と日本語の膠着性

後援：名古屋大学大学院国際言語文化研究科「応用・心理言語学分野の
レクチャー・チュートリアルによる大学院教育高度化推進プロジェクト」

共催：現代日本語学研究会

講
師

熊倉千之先生
(元金城学院大学文学部・教授)

日
時

2012年3月21日(水) 午後5時半～7時

場
所

名古屋大学・全学教育棟北棟406室

「生ム・汲ム・積ム」のように、「ム」に終わるヤマトコトバは、/m/音が何かを内包する意味を共通にもっています。また、/u/という母音は、時間と共に「...../tutu/ある」現象を表現します。「降る雪」と言えば、「降り/tutu/ある雪」のことです。認知現象の音声化や、動詞・名詞の意味が<イマ・ココ>の時空で膠着する様相について考えます。

来訪歓迎・申し込み不要